昭和25年3月14日　第三種郵便物承認　令和3年12月1日発行（毎月1回1日発行）通巻868号

禅の友

—Zen no Tomo—

12

December 2021

ご本山だより

大本山永平寺【師走】

十二月の大本山永平寺では一日から八日まで、お釈迦さまのお悟りに因んだ臘八摂心会を修行し、八日の朝には成道会を修行します。続いて九日には二祖慧可さまに因んだ断臂摂心、断臂会と行持が続きます。

また、年末年始に向けての準備も様々ございますが、これは永平寺に限らず、「師走」のとおり全国のご寺院さま、檀信徒皆さまもお忙しくお過ごしのことと存じます。

道元禅師の傘松道詠に次の和歌がございます。

徒に　過す月日は　おおけれど
道をもともる　時ぞすくなき

日常生活、特に年末を慌ただしく過ごす中で、つい大切なことを疎かにしてしまいがちです。

道元禅師は『正法眼蔵』「行持」の巻に「徒らに百歳生けらんはうらむべき日月なり、悲しむべき形骸なり」ともお示しされておられます。

年末だから、新しい年を迎えるからと、特別に気持ちを込めてお掃除などをすることも大切です。しかし、道元禅師のみ教えをいただく永平寺の修行僧は、特別な日だから掃除をするのではなく、日日の行持として、毎日の当たり前の行いとしてお掃除を修行させていただいております。

「忙しい、忙しい」と何かと後回しや先送りにしてしまっては、気付いた時には大切な月日が過ぎ去ってしまいます。

だからこそ永平寺では、「『今』行うべきことを『今』行う」という修行を日々行じております。

まさに今この瞬間も永平寺の修行僧たちは、道を求め、一息一息を大切に修行しております。

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより

大本山總持寺

【参禅は道心ある是れ初めなり】

『伝光録』第五十祖天童如浄禅師章

大本山總持寺
☎〇四五・五八一・六〇二一

師走・極月などとともに、臘月は十二月の異称で年末のことを臘尾と言ったり、年が明けて前年となった十二月のことを旧臘と言ったりします。

とくに修行道場では一日から八日未明まで「臘八摂心」と言って一切の行持を停止して参禅に打ち込む厳しい修行が行われます。

これは、釈尊が臘八（十二月八日）の暁に大悟して成道したことに因んだ一年最後の大切な修行期間なのです。

如浄禅師は「参禅は道心を持つことが一番に大切なことである。たとえ、仏教や禅に学問があったとしても道心がない人にはそれを保持していくことはできない」ときっぱりと言っているのが標題の意味する所なのです。

それではその「道心」とは何なのでしょうか。

一人一人のこころざし、あるいは目標、決定心とも言えます。

何事においてもそうした強い心がなければ全てが無駄になってしまうでしょう。

人はこれで充分だと思ってしまうとそこまでであります。向上の一歩を進むにはさらに強い意志が必要となってきます。

まさに「百尺竿頭に一歩を進む」です。そんな「道心」があってこそ八日間の厳しい「臘八摂心」を勤めることができるのです。

振り返れば今年もコロナウイルス感染症の拡大により当たり前だった生活が一変させられた日々でありました。

来年こそ終息がかない平穏な世界が戻ってくることを願って止みません。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

この辺り恋文横町落し文

三重県　西村廣親

評　「落し文」とは葉を巻いてそこに産卵し地上に落とされた虫の卵を言う。それを恋文に喩えた句である。恋文横町は渋谷にあって私も行ったが今はどうなっているか。むろんその横町に季題の落し文はないと思うが、この架空の恋の取り合わせのセンスに惹かれた。

アルバムでまた秋の旅するふたり

群馬県　大渕　洋

評　なんとも哀愁と余韻のある句。恋人であった二人の回想の風景。コスモス畑や秋の浜辺を想像した。はたしてその後夫婦となられたのだろう。現在はお二人でその時の写真をアルバムで見られているのだろうか。「秋の旅」であるからこその切なさ。

◆一斉に野火放たれし声の中　佐賀県　池内淳子

◆誰がつけたの白桃に傷新た　北海道　中西千晶

◆砂浜があるだけの島秋燕　千葉県　長澤きよみ

◆新米の香りの中に母の顔　福井県　廣瀬しのぶ

◆蚊帳吊りて鏡に髪を梳きにけり　東京都　友野　瞳

◆灯り消し雨音だけの夜長かな　埼玉県　橋本永子

◆にぎやかに案山子かかげて子等が行く　鳥取県　徳本義則

◆秋の日や男と女背を向けて　大阪府　岡　恭介

◆秋声や吾に寄り添ふ吾ひとり　静岡県　池谷硬司

◆半島は海に挟まれ鰯雲　千葉県　甲斐　勇

選者吟

たましひの舞ふかたちして胡蝶蘭

俊樹

作句小見　私事ではあるが、先日母を亡くし頂いた供華の胡蝶蘭のことを詠った。その蝶のような花弁が魂の羽ばたきのように見えた。それを母の魂と重なり合わせて作った句。「かたちして」という措辞は「喩え」である。「如く」と言うより切なさを出したかった。

【送付先】〒105-8544　東京都港区芝2-5-2　曹洞宗宗務庁　禅の友係

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

朝風にをさなごの髪さやさやと小さきでむしは大発見だ

三重県　藤川 幸子

評　朝のさわやかな風に柔らかい髪をさやさやとそよがせながら、小さな手のひらに小さな蝸牛（かたつむり）をのせて帰ってきた幼子。その冒険を、祖母かと思われる作者が最大限に讃えている。こぢんまりとまとめなかったところが良かった。

髪切（かみきり）虫の死骸（むくろ）転がる出入口夜起きしこと人は知らざり

静岡県　小川 健治

評　早朝の門口で見つけた虫の骸から、虫の世界へと想像力を膨らます作者。夜の間に起こった惨劇は何であったかと。結句の「人は知らざり」には虫の世界への敬意が籠もる。

◆楠の根の伸ぶるあたりの敷石の盛り上がりいて白く光りぬ
広島県　徳永 進一郎

◆遠き日に田を打つ母を呼びとめて大和の薬師は荷を広げたり
三重県　西村 廣視

◆コロナ禍にて場所知らされぬ花火大会城の本丸址辺りとふ
茨城県　田口 昭子

◆お母さんお茶にしないか昼寝より笑顔の亡夫の声に起こさる
長野県　山﨑 さと子

◆学ぶとは真似ることだと盆踊り教わるでなく母の後追ひ
島根県　横山 豪吾

◆ハマナスが啄木像に添ふ岬異国の人と海を眺めた
秋田県　小松 紀子

◆真剣さ欠く畑作を続けきて上達はせず土に謝る
岐阜県　後藤 進

◆轟音を立てて大型トラックの過ぎたる闇にちちろ虫鳴く
鳥取県　眞山 博充

◆ふと気付く窓に映れるわれの顔どの息子（こ）が似てるじいっと見たり
北海道　菊地 和子

◆密やかに編まるるものかあらはれて不意に煌めく蜘蛛の糸かな
熊本県　島田 佳可

選者詠

うた詠むを許さざるその日常と嘆く電話にふかくうなずく

ちづ

作歌小見　社会の出来事を素材に詠うとき大切なのは、その出来事の事実をきちんと捉えること。仄聞（そくぶん）したことなら調べて見る必要があり、そこで考えが更に深まることも。面倒と思わずに挑戦することが作歌の領域を広げることにもなるでしょう。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。